2025 年度事業報告（原案）

（2025 年 7 月 1 日～2026 年 6 月 30 日）

JISE は、生態学を通じて持続可能かつ生物多様性の保全に即した社会の実現を目指し、地域から地球規模にいたる生態系の回復と創造に向けた実践的な調査研究、及び生態学や自然再生に係る研修や自然環境に関する情報の収集と提供等を実施した。IGES 生物多様性・森林領域ユニット等との研究活動における協働促進を図った。

2025 年度の財務状況の概要としては、収入は 80.2 百万円、支出も 80.2 百万円となり、収支は均衡した。なお、収入には JISE 運営基金の元本取り崩し（35,074,100 円）による振替額を含む。2025 年度は具体的に以下の事業を行った。

(1) 研究開発事業

国際研究として、30by30 目標達成への貢献として、熱帯林及び里山林の再生技術を確立するため、マレーシア、ラオス、台湾等における植生調査及び再生の実践プロジェクトを推進するとともに、環境教育に関連する国際的な研究を進めた。

国内研究では、1970 年代から植栽された宮脇方式の環境保全林を対象に、その構造や環境保全機能についての評価解析を進めるとともに、ネイチャーポジティブを念頭に、自然共生サイト（OECM）等を対象にして、地域の森づくりや自然再生、及びそのモニタリング、順応的管理を自治体、民間企業，NPO、市民、大学等と共同で進めた。里地里山を対象とした生物多様性評価や環境教育に関する研究を進める。森林再生の基礎となる潜在自然植生の判定のため、各地の植生の調査を継続して実施した。

(2) 人材育成事業

森づくりや自然再生などの活動を支えるリーダー的人材の育成に向けて、植生生態学や関連分野をベースとした「植生調査研修」を官公庁・企業・団体の職員や市民、学生を対象として開催した。また、生態学的な自然認識の基礎能力の習得や環境保全への理解の促進へ向けて、広く一般市民を対象とした環境学習会（エコロジー教室）を開催した。また、地域貢献の一環として、神奈川県立生命の星・地球博物館など県の機関と連携した自然観察会も一層の充実を図った。

(3) 交流事業

一般市民を対象とした「IGES-JISE 市民環境フォーラム」を「植生図から何がわかるのか―わたしたちを取り巻く自然環境と生活空間―」を開催し、研究員及び専門家による講演及び討論を実施した。さらに神奈川県立産業技術総合研究所（KISTEC）等との事業連携による人材育成や普及啓発を兼ねた交流事業を展開した。

(4) 普及啓発事業

研究事業や人材育成、交流事業などの活動をウェブサイトやニュースレター（2025 年 10 月、2026 年 3 月発行）に掲載した。さらに、研究員による調査研究レポート JISE REPORT No.13 の発行を 2025 年 10 月に行った。

【事業内容】

１．研究開発事業（運営規程第３条第１号事業）

（１）熱帯の森林に関する生態学的調査・実証研究

目　　的：熱帯の多様な森林植生とその生育環境に関する生態学的調査研究を実施する。調査結果に基づいて、森林生態系の保全と地域固有の樹種による熱帯林再生事業を実践し、地球規模で進行している温暖化や熱帯林の減少に対して、その保全と再生の技術を確立することを目的とする。

研究項目：①熱帯雨林など多様な群落の類型化の把握、解析
②植生を構成する各群落とその立地特性の把握
③熱帯林の保全と再生過程の解明、植栽樹種の生長解析による種生態の解明

研究地域：マレーシア・ボルネオ、ケニア、台湾、フィリピン

研究内容：熱帯域に広がる自然生態系、特に熱帯林を中心に現地調査ならびにデータ解析を進める。さらに、30by30 目標達成への貢献として、宮脇方式の森林再生を実践し、自然生態系の保全と再生過程の解明に努める。

到達目標：得られた知見を植生学会、日本生態学会等で発表・論文投稿を行う。

研究資金：自主研究費

研究成果：①目黒伸一 植生学会第 30 回鹿児島大会（2025 年 10 月）発表・要旨 “東アジアと東アフリカにおける常緑広葉樹林の構成種組成の上位分類階級の保存性について.”
②目黒伸一 日本生態学会第 73 回京都大会(2026 年 3 月）発表・要旨 “旧熱帯区と全北区に出現する常緑広葉樹林の植物社会学による組成的再現性について.”
③Meguro, S. Vegetation distribution and characteristics in Kenya based on species composition and elevation. Eco-habitat（投稿中）.

（２）里山の生物多様性評価法および環境教育に関する研究

目　　的：生物多様性保全のために持続可能な生態系管理が緊急課題となっている地域を対象に、自然とその寄与（Nature’s Contributions to People: NCP）に関するフィールド調査、分析・評価を通して、地域の里山、自然・生物資源や生物多様性にまつわる在来知を活用した自然再生・環境教育のあり方を具体化し、生物多様性保全や持続可能な生態系管理のための地域戦略に資する実務的・政策的提案を行う。

研究項目：①協同学習プログラムの実践を通じた自然の価値と子どもの声の影響に関する研究
②ビエンチャン特別市グリーン政策における生物多様性配慮アクション強化プログラム
③都市の新規創成里山・緑地で回復した生物多様性とその恩恵の評価に関する研究
④国指定特別天然記念物「田島ヶ原サクラソウ自生地」における植生学的研究

研究地域：国外（ラオス・ビエンチャン特別市、シェンクワン県）、国内（川崎市、さいたま市ほか）

研究内容：ラオスの一地域に焦点を当て、成人・子どもを含む地域の人々の自然体験や生物

多様性の知の豊かさ、自然の価値認識を可視化する調査研究に着手すると共に、それらの成果を地域コミュニティの協同学習、経験共有の取組に活用し、子ども達から発信される情報が地域住民（成人）の意識・行動にどのような影響を与えうるかを明らかにする。以って「子どもの声が届く環境づくりが地域の環境改善に向けた各種取組の推進力となる可能性」を探究し、生物多様性教育と子どもの権利教育との統合的アプローチを基軸とした総合環境教育の社会実装を具体的に進めていく（研究項目①）。

ラオスの首都・ビエンチャン特別市での生物多様性保全に配慮した着実な緑化・森林再生を実現するため、同市内の在来樹種の分布・生態及び幼苗生産技術（生物多様性に配慮した緑化推進基盤の形成）に関する調査研究を進めると共に、開発した「ランドスケープ描画法」のアウトプット（児童の絵画）の含意について、生物多様性の知恵や生物との関わり、自然体験の豊かさの側面から分析し、教育現場での同法の社会実装（生物多様性教育の推進）に向けた課題を明らかにする（項目①②）。

川崎市幸区に創られた公園緑地（2011 年 10 月植栽のクヌギ・コナラを主体とする里山林と草地）を対象に、生物調査と利用者意識に基づく自然の恩恵の評価に取り組む（項目③）。2010 年以降、サクラソウ（ラメット数）が急減している対象地において植物社会学的植生調査を実施し、減少要因の究明と保全策の提案に取り組む（項目④）。

到達目標：連携機関や共同研究者が協働し、次年度以降の活動展開に向けた案件形成（共同提案）が実現する（項目①）。フタバガキ科樹木を中心に在来樹種の幼苗（年間 5 万本）の生産体制（優良苗育成技術）が確立されると共に、新たな生産拠点のモデル（学校苗圃）が少なくとも市内１カ所、育成苗木の植栽試験が少なくとも１カ所で実現する（項目②）。調査研究成果に係る論文・報文が学術誌上で公表される（項目②③④）。

研究資金：地球環境基金（項目①）、経団連自然保護基金（項目②）、自主財源（項目①～④）

連携機関：ビエンチャン特別市農林業事務所、同市林業セクション、シェンクワン県農林業事務所、横浜国立大学総合学術高等研究院、埼玉大学教育学部栽培学研究室、さいたま市文化財保護課、NPO 法人幸まちづくり研究会、新川崎ふれあい公園管理運営協議会、IGES 研究ユニット

研究成果：ラオスの村落での協同学習プログラム（項目①）では、住民が子どもの声を地域の未来像に結び付ける意欲を示し、児童の描画や発言を通じて大人の意識変化が確認された。これにより、子どもの声が地域環境改善の推進力となり得る実践モデルが提示された（成果物 1、2）。

ビエンチャン特別市での緑化政策支援（項目②）では、行政機関との協働により年間 5 万本以上の在来樹木苗生産体制を確立し、学校苗圃を通じて教育と都市緑化を統合した持続的活動モデルを構築した。ランドスケープ描画法による授業を通じて子ども達の自然体験を可視化し、都市緑地の便益評価に資する基盤を形成した。これらの取組は、国際協働の枠組みを強化し、途上国におけるネイチャー・ポジティブ戦略の社会実装に具体的な貢献を果たしている（成果物 3、4、5）。

川崎市「体験の森」での利用者調査（項目③）では、心理的充足、社会的結束、学習的効果といった便益が確認され、市民協働による環境創成活動がネイチャー・ポジティブ戦略の実践モデルとして波及し得ることが示された（成果物 6、7、8、9）。
田島ケ原サクラソウ自生地に関する研究（項目④）は、前年度からの継続として報告書をとりまとめ、さいたま市教育委員会より一般公開された（成果物 10）。
以上の成果は、国際協働と地域教育の双方を基盤に、生物多様性保全と持続可能な生態系管理に向けた実務的・政策的提案へと結実している。

【成果物】

1) IGES 国際生態学センター. 地球環境基金 実績報告書「協同学習プログラムの実践を通じた自然の価値と子どもの声の影響に関する研究」 16pp. (2026.4)
2) 矢ケ崎朋樹. 巻頭言 人と自然の共育をめざす―協働科学と実践の視座から―. JISE Newsletter No. 101 【印刷中】
3) Yagasaki, T. Poster Session: Programs for Strengthening Biodiversity-friendly Actions in Green Policy of Vientiane Capital, Lao People's Democratic Republic. The International Forum for Sustainable Asia and the Pacific (ISAP) 2025. (2025.7)
4) 矢ケ崎朋樹.ビエンチャン特別市グリーン政策における生物多様性配慮アクション強化プログラムー中間成果と今後の課題. JISE REPORT 13: 11-14. (2025.10)
5) IGES 国際生態学センター. 経団連自然保護基金 最終報告書「ビエンチャン特別市グリーン政策における生物多様性配慮アクション強化プログラム」24pp. (2026.4)
6) 矢ケ崎朋樹・譚瀟洋. 14 年生里山緑地の利用者意識に基づく便益の探索的評価 ―新川崎ふれあい公園・体験の森における質問紙調査による分析―. 自然環境復元学会 第 26 回全国大会研究発表・講演要旨集, 57-60. (2026.2)
7) 矢ケ崎朋樹. 都市里山から考える“30by30 plus（仮称）”―みどりの質と人のウェルビーイングの視点から―. JISE・IGES シンポジウム「回復する自然と育つコミュニティ―みんなで創る都市里山と未来のビジョン―」講演資料 (2026.6)
8) 譚瀟洋・齊藤修・矢ケ崎朋樹. 新川崎ふれあい公園・体験の森における樹木の大気環境改善効果の試算と利用者意識の検討. 自然環境復元研究【査読審査中】
9) Yagasaki, T. & Tan, X. Exploratory Evaluation of User-Perceived Benefits in 14-Year-Old Satoyama Green Spaces: A Descriptive Statistical Analysis Using a Multi-Item Questionnaire at Taiken-no-mori, Shin-kawasaki Fureai Park, Kawasaki City, Japan. 自然環境復元研究【査読審査中】

10）矢ケ崎朋樹・荒木祐二．現存植生図．『さいたま市教育委員会事務局編．特別天然記念物 田島ケ原サクラソウ自生地緊急調査報告書』，42-50+付図 1．（2026.3）
11）矢ケ崎朋樹・倉田薫子・高芝麻子・原口健一・河内啓成．都市部と中山間域の子どもを対象とした自然体験と感性・素養の比較研究－神奈川県内２地域を例に－．横浜国立大学教育学部紀要 I，教育科学 9：342-346．（2026.3）
12）川島逸郎・矢ケ崎朋樹．逗子市でのアカギカメムシの目撃記録．神奈川虫報，217：63．（2025.12）

（３）植生生態学分野の文献資料のデータベース化とその解析

目　　的：国際生態学センターに所蔵する文献・資料、特に植生生態学に関するものは、1970 年から 2000 年の 30 年間だけでも 500 件を超える。これらのデータベース化とその解析を行い、変遷(植生研究史)などを明らかにし、今後の環境保全林事業・SDGs 分野の研究・実践活動に資することを目的とする。

研究項目：①国際生態学センターが所蔵する植生生態学分野を中心とする文献データや資料の整理(データベース化)
②データベース化した研究資料の解析

研究内容：国際生態学センターには、植生生態学（植物社会学並びに隣接分野）関連の文献資料がほとんど全て集積されている。これらの文献資料をデータベース化することに留まらず、データ解析により、時系列的変動、調査対象域の特徴、発表形態などを明らかにする。さらに、環境保全林、SDGs などの研究・実践活動に資する内容の有無を提示する形でまとめていく。

到達目標：利用可能なデータベースの構築

研究資金：自主財源

（４）環境保全林および森林の評価・機能に関する調査・研究

目　　的：自然共生サイト（OECM）などに生育している自然林・二次林といった自生林並びに 1970 年代に開始された宮脇方式による環境保全林形成地を対象として、その構造や機能に基づく定量的評価手法を開発することを目的とする。

研究項目：①環境保全林が有する緩衝機能（気温緩和機能等）や環境保全機能について、植物個体群および群落レベルでの具体的データの収集・解析
②既存の環境保全林の森林再生および生物多様性からみた評価手法の確立
③環境保全林の樹種別生長動態に関する評価
④森林を構成する樹木の特性と種生態の関係解明
⑤環境保全林に関する小冊子（Q&A）編集
⑥森林のナラ枯れに関するデータの収集・解析

研究地域：秋田県、岩手県、神奈川県、長野県など

研究内容：国内外において創出されている環境保全林の生長調査は、樹高や直径、材積量などの経年変化から評価されてきたが、再生目標とする自然林との比較研究は進んでいない。本プロジェクトでは、環境保全林および鎮守の森、自然林などに関して蓄積されてきた資料、または、再調査に基づき、自然林との隔たり（群落の成

熟度）を評価する試みを進める。また、森林および環境保全林が発揮している機能について調査研究を行う。

到達目標：一般向けの普及啓蒙書として、環境保全林に関する小冊子（Q&A）の出版または公開。スズキとの共同研究の報告書作成。

研究資金：自主財源、スズキ共同研究費

研究成果：①勝川晴太、平松蒼大、毛利友輔（長野県中野西高等学校）目黒伸一（国際生態学センター）日本生態学会第 73 回京都大会(2026 年 3 月）発表・要旨 “志賀高原の亜高山帯における植物社会学に基づいた森林再生への挑戦”.

②目黒伸一　スズキ共同研究報告書

③原田洋・林寿則. 2025. 関東地方照葉樹林 3 群集の主要優占樹種の果実の特性. JISE REPORT(13):1-2.

（５）環境保全林の防火・防災機能に関する植生学的研究

目　　的：多発する自然災害に対し、森林の防災効果が注目されている。都市域に造成された環境保全林には、地震火災等に対する防火機能が期待されることから、環境保全林の主要構成樹種をはじめとする樹木の防火機能を定量的に比較評価する。

研究項目：①樹葉の厚さや含水率の比較評価

②輻射熱に対する樹葉の燃焼性状についての比較評価

③接炎に対する樹葉の燃焼性状についての比較評価

④過去の災害教訓や樹木の防火機能を評価した既存資料の収集と整理

⑤林床に堆積する落葉の燃焼性状に関する実験

⑥街路樹の歴史と災害について

研究地域：東京都、神奈川県、横浜市など

研究内容：樹木の防火機能と関連性が高いとされる樹葉含水率や火熱に対する発火・燃焼性状あるいは難燃性について、加熱乾燥式重量計や小型電気炉等を用いた実験に基づき検証する。また、災害と都市域の植栽樹種の変遷との関連について文献調査を行う。

到達目標：落葉の耐火性に関するレポートを公表する。また、都市の街路樹の変遷について、災害の歴史との関連、防火的視点から整理・解析を進める。

研究資金：自主財源

研究成果：①林寿則. 2025. 災害後の植生回復　－歴史に学ぶ戦災樹木と被災地の植生復元－. JISE REPORT(13):16.

②林寿則. 2025. 災害時の樹木の防火機能とその活用について, JISE REPORT (13):25-28.

③林寿則. 2025. 都市域に堆積する落ち葉の燃焼性状その２　－火炎近傍及び輻射熱に対する発炎. JISE REPORT(13):3-6.

（６）生物多様性の保全に寄与する森づくり・自然再生のための生態学的な研究

目　　的：国、地方自治体、企業、民間団体、市民と協同で潜在自然植生にもとづいた土地

本来の樹種による防災・環境保全林および生物多様性の保全に寄与する生態系の再生を実践・指導する。さらに、生態系の修復・創造、緑環境の形成およびその機能に関する研究を推進することを目的とする。

研究項目：①植栽適正樹種群選定のための潜在自然植生の判定
②環境保全林の緩衝機能に関するデータの収集・解析
③環境保全林および自然再生地の発達動態に関するデータの収集・解析
④モニタリング調査を基盤とした順応的管理の具体的提案

到達目標：潜在自然植生による植生樹種選定とそれらの樹種による生態学的植樹の実施

研究内容：これまで実施された環境保全林の植樹地および新規の森づくりプロジェクトを対象に、受託・共同研究先と協働し、各研究項目を進める。

研究地域：秋田県、長野県、所沢市、さいたま市、岩手県など

受託・共同研究先：DOWA ホールディングス株式会社、東日本旅客鉄道株式会社、長野県山ノ内町、埼玉県所沢市、横浜ゴム株式会社、スズキ株式会社など

研究成果：①第 16 回ＤＯＷＡの森「小坂・ふるさとの森づくり植樹祭」植栽樹種提案、植樹指導
②勝川晴太、平松蒼大、毛利友輔（長野県中野西高等学校）目黒伸一（国際生態学センター）日本生態学会第 73 回京都大会(2026 年 3 月）発表・要旨 “志賀高原の亜高山帯における植物社会学に基づいた森林再生への挑戦”.
③2026 年度「一関ふるさとの森づくり」における植栽樹種提案および植樹指導（JR 東日本主催）

【成果物】

1) 目黒伸一　所沢市緑地整備調査等業務調査報告書
2) 目黒伸一　出雲斐伊川放水路等における環境保全林踏査報告
3) 目黒伸一　鉱山跡地での生態系回復事業について（JISE REPORT No,13. 2025 年 10 月）
4) 目黒伸一　DOWA ふるさとの森づくり（JISE Newsletter Vol.100. 2025 年 10 月）

２．人材育成事業（運営規程第３条第２号事業）

2025 年度は、対面型の自主事業を実施するとともに、神奈川県立生命の星・地球博物館をはじめとする県内外の連携機関・団体からの要請を受け、共同企画・共催及び講師派遣による事業の充実化を図った。

（１）植生調査研修

自然環境の基礎調査や環境アセスメント分野で必須となっている、群落記載や分類に資する「植物社会学的植生調査」を主にとりあげ、基礎概念や調査方法などの基本的事項について、室内講義と野外実習を通して理解を深めるための研修を実施した。

ａ．テーマ：植生調査研修－みどりの分け方、調べ方

ｂ．会　場：IGES 本部、天神島ビジターセンター、天神島臨海自然教育園
ｃ．対　象：一般（群落分類・植生調査経験がない又は少ない方）
ｄ．開　催：2026 年 5 月 19 日（火）～5 月 21 日（木）
ｅ．講　師：鈴木伸一・鈴木邦雄・矢ケ崎朋樹（IGES-JISE）、田中徳久(神奈川県立生命の星・地球博物館)、山本薫（横須賀市自然・人文博物館）
ｆ．共　催：神奈川県立生命の星・地球博物館
ｇ．協　力：横須賀市自然・人文博物館
ｈ．後　援：神奈川県　自然環境復元学会
ｉ．参　加：10 名
ｊ．内　容：5 月 19 日
室内講義「群落記載・分類の基礎」（鈴木伸一）
室内講義「植物の分け方、調べ方」（山本薫）
室内講義「地域の植物相調査と標本データの活用」（田中徳久）
野外実習「野外調査の心得」（鈴木伸一）
野外実習「ブラウンーブランケ法の基礎理論と実践」(矢ケ崎朋樹･鈴木伸一）
5 月 20 日
野外実習「植物社会学的植生調査」（鈴木伸一・矢ケ崎朋樹・山本薫）
5 月 21 日
室内講義「植物社会学的植生調査」（鈴木伸一）
室内講義「作業フォローアップ」（矢ケ崎朋樹）
室内講義「日本の植生と生態学の考え方」（鈴木邦雄）
ｋ．公　表：矢ケ崎朋樹・鈴木伸一・尾﨑光彦・田中徳久・山本薫. 植物社会学的植生調査における最小面積概念の教育的再現性－低茎草原における種数-面積曲線の実測. JISE REPORT 14.【印刷中】

（２）環境学習（エコロジー教室）

野外の身近な生物（植物、花粉、種子・果実、昆虫など）や鉱物（砂粒）の観察を通して、日頃は意識することの少ない自然要素への新たな気づきや生態、利用、種の多様さへの驚き・学習の面白さの体験を促すことをねらいとした、子どもから大人までが共に学べる対面形式の学習会を開催した。

ａ．テーマ：けんび鏡で見るふしぎな世界
ｂ．会　場：葉山しおさい博物館・葉山しおさい公園・葉山一色海岸
ｃ．対　象：小学生とその保護者
ｄ．開　催：2025 年 7 月 26 日（土）、7 月 27 日（日）、7 月 29 日（火）いずれも 10:00-15:00
ｅ．講　師：矢ケ崎朋樹（IGES-JISE）・倉持卓司(葉山しおさい博物館)
ｆ．共　催：葉山町教育委員会
ｇ．参　加：計 67 名（大人 35 名、小学生 32 名）

ａ．テーマ：生き物っておもしろい―くるくる回って落下する植物のたねの模型を作ってとばそう（生物模倣工作教室）

ｂ．会　場：牛久保公園（横浜市都筑区）
ｃ．対　象：子ども（小学生以上）とその保護者
ｄ．開　催：2025 年 11 月 9 日(日) 10:00-15:00
ｅ．講　師：矢ケ崎朋樹(IGES-JISE)・倉田薫子（横浜国立大学）
ｆ．共　催：牛久保公園愛護会　横浜国立大学里山 ESD BASE
ｇ．参　加：25 名（大人 11 名、子ども 14 名）

ａ．テーマ：都市につくられた里山の生き物さがし
ｂ．会　場：新川崎ふれあい公園「体験の森」（川崎市幸区）
ｃ．対　象：子ども（5 歳児以上）とその保護者、中高生・大学生、成人
ｄ．開　催：①2025 年 10 月 5 日（日）10:00-12:15　②2026 年 4 月 25 日（土）10:00-12:15（希望者のみ「植物＆昆虫調査」13:00-15:00）
ｅ．講　師：矢ケ崎朋樹(IGES-JISE)・倉田薫子（横浜国立大学）・川島逸郎（昆虫画家）
ｆ．共　催：NPO 法人幸まちづくり研究会　新川崎ふれあい公園管理運営協議会　横浜国立大学里山 ESD BASE
ｇ．後　援：川崎市
ｈ．参　加：①②計 66 名（大人 34 名、小・中学生、未就学児 32 名）

（３） 野外観察会（神奈川県立生命の星・地球博物館主催、IGES 国際生態学センター共催）
ａ．テーマ：磯の生きものウォッチング
ｂ．会　場：三ツ石海岸（足柄下郡真鶴町）
ｃ．対　象：小学生とその保護者
ｄ．開　催：①2026 年 4 月 19 日(日) ②2026 年 5 月 17 日(日)
ｅ．講　師：佐藤武宏･石田祐子･加藤ゆき(県博)、矢ケ崎朋樹(IGES-JISE)

（４）体験出前教室（神奈川県立産業技術総合研究所主催）
ａ．テーマ：花粉っておもしろい
ｂ．会　場：①横浜市立竹山小学校　②川崎市立南百合丘小学校
ｃ．対　象：①5 年生（計 31 名）　②5 年生（計 113 名）
ｄ．開　催：①2025 年 9 月 16 日(火) 13:35-15:05　②2025 年 10 月 1 日（火）9:30-14:15
ｅ．講　師：①②矢ケ崎朋樹(IGES-JISE)　②増田明子（補助）

（５） 生物多様性教育を考える勉強会(横浜国立大学総合学術高等研究院生物文化多様性ラボ主催、 IGES-JISE 共催、新川崎ふれあい公園管理運営協議会・幸まちづくり研究会・葉山しおさい博物館協力)
ａ．会　場：①オンライン　②新川崎ふれあい公園「体験の森」　③葉山しおさい博物館・潮見亭、葉山一色海岸、大浜海岸
ｂ．対　象：小中学校教員
ｃ．開　催：①2025 年 8 月 22 日（金）10:30-12:00　②2025 年 10 月 5 日（日）13:00-15:00　③2026 年 3 月 29 日（日）10:00-15:00

ｄ．講　師：①倉田薫子（横浜国立大学）・矢ケ崎朋樹(IGES-JISE)　②倉田薫子・矢ケ崎朋樹・川島逸郎　③倉田薫子・矢ケ崎朋樹・倉持卓司（葉山しおさい博物館）

（６） 学習会・観察会・研究会・ワークショップ等への講師派遣

ａ．主　催：NPO 法人幸まちづくり研究会・新川崎ふれあい公園管理運営協議会
ｂ．共　催：IGES-JISE
ｃ．テーマ：みんなでつくる体験の森(都市の里山）学習会「生物調査の成果報告と今後―多くの生き物が棲める環境づくりとは―」
ｄ．会　場：東海道かわさき宿交流館（川崎市川崎区）
ｅ．対　象：一般市民
ｆ．開　催：2026 年 1 月 18 日(日）10:00-12:00
ｇ．講　師：矢ケ崎朋樹(IGES-JISE)

ａ．主　催：西鎌倉山自治区「森守会」
ｂ．テーマ：私たちの住まう西鎌倉山地区の自然を学ぶ：専門家を招いての自然教育
ｃ．会　場：西鎌倉山南公園（鎌倉市）
ｄ．対　象：地域住民一般（子ども～成人）
ｅ．開　催：①2025 年 12 月 5 日(日）9:30-12:00　②2026 年 5 月 24 日(日）9:30-12:30
ｆ．講　師：矢ケ崎朋樹(IGES-JISE)
ｇ．公　表：矢ケ崎朋樹・森尚樹. 足元から始める市民協働の公園植物調査：実践からみえる「自然との共生」. JISE Newsletter No.102（印刷中）

３．交流事業（運営規程第３条第３号事業）

環境と調和した持続可能な社会の発展に資するため、環境に関する研究開発の基礎となる情報の集積と提供を行う。また、生態学の立場から環境問題の解決を積極的に図るため、新たな研究開発の動向等の討議、生態学分野の第一線で活躍する研究者とのシンポジウムの開催、内外研究機関との人材・情報の交流をおこなった。

（１）情報提供事業

JISE が所蔵する全国の現存植生図、植物社会学的研究報告書の閲覧・貸出等を行う。また、学術研究、緑環境再生、自然環境学習などに関する問い合わせに対して情報の提供を継続した。なお、学術研究誌『生態環境研究』については、近年の学術誌を取り巻く環境変化に伴う今後のあり方の検討状況を踏まえ、当年度の発行は見送ることとした。（普及啓発事業に再掲）。

（２）研究会の開催

2025 年度においては、研究会および公開研究会の開催には至らなかった。

（３）「IGES-JISE 市民環境フォーラム」の開催

ａ．テーマ：植生図から何がわかるのか ―わたしたちを取り巻く自然環境と生活空間―
ｂ．内　容：①開会挨拶
②企画趣旨説明
③【講演 1】植生図とは何か―植生の分布をどう表すか―【講演 2】衛星リモートセンシングによる植生図作成【講演 3】現存植生図 2024 と今後の植生図全国整備
④ディスカッション・質疑応答
⑤閉会の辞
ｃ．登壇者：原慶太郎(東京情報大学 名誉教授)、山下慎吾(環境省 自然環境局 生物多様性センター)、鈴木伸一(IGES-JISE)、総合司会：尾﨑光彦(IGES-JISE)
ｄ．参　加：263 名
ｅ．方　式：オンライン
ｆ．会　場：IGES 本部
ｇ．言　語：日本語
ｈ．事業資金：自主財源

（４）「JISE・IGES 主催シンポジウム」の開催

ａ．テーマ：回復する自然と育つコミュニティ：みんなで創る都市里山と未来のビジョン
ｂ．共　催：新川崎ふれあい公園管理運営協議会　NPO 法人幸まちづくり研究会　横浜国立大学里山 ESD BASE
ｃ．後　援：神奈川県　川崎市　自然環境復元学会
ｄ．内　容：①開会挨拶
②オープニングセッション
③パネルディスカッション
④閉会の辞
ｅ．登壇者：①寺下明文（神奈川県環境農政部)･小野洋（IGES)、総合司会：川上毅（IGE)
ｆ．参加者：235 名（主会場 35 名　オンライン 200 名）
ｇ．方　式：対面・オンライン併用
ｈ．主会場：川崎市コンベンションホール(川崎市中原区)
ｉ．言　語：日本語
ｊ．事業資金：JISE 自主財源

４．普及啓発事業（運営規程第３条第４号事業）

SDGs の達成に向けた取り組みとして、本センターの活動状況や緑環境再生・創生に向けた発信、普及啓発のための機関誌を発行するとともに、ホームページによる研究成果の紹介を進めた。なお、学術研究誌『生態環境研究』については、近年の学術誌を取り巻く環境変化に伴う今後のあり方の検討状況を踏まえ、当年度の発行は見送ることとした。

（１）IGES-JISE センター機関紙「IGES-JISE ニュースレター」の発行

ａ．刊行実績：JISE News Letter Vol.100（2025 年 10 月発行)、JISE News Letter Vol. 101（2026 年 3 月発行）
ｂ．印刷部数：各 1100 部
ｃ．配 布 先：会員および国、地方自治体、国際機関、大学・研究機関、企業・団体等
ｄ．事業資金：JISE 会員会費

（２）学術研究誌（紀要）『生態環境研究』第 32 巻の刊行

近年、関連分野全体において論文投稿数の確保が課題となっている現状があり、本誌においても質の高い掲載論文を安定的に確保することが困難となっている。 このような状況を受け、現在、本誌の今後のあり方（隔年発行などの発行頻度の見直しや、今後の存続も含めた抜本的な検討）について内部で協議を進めている。このため、当年度（第 32 巻）の発行、およびそれに伴う J-STAGE への論文公開は見送ることとした。

（３）調査研究レポート『JISE REPORT』の刊行

ａ．刊行実績：JISE REPORT No.13（2025 年 10 月発行）
ｂ．印刷部数：500 部
ｃ．配布先：研究・賛助会員および国・地方自治体、国際機関、大学、研究機関、企業
ｄ．事業資金：JISE 研究・賛助会員会費